様　式　Ｃ－１９、Ｆ－１９－１、Ｚ－１９　（共通）

科学研究費助成事業　　研究成果報告書

平成 ３０ 年　 ５ 月　 ９ 日現在

機関番号：１６４０１
研究種目：若手研究(B)
研究期間：2015～2017
課題番号：１５Ｋ１６４６８

研究課題名（和文）戦後日本の大学スポーツの実証的研究―部活・サークル二重構造の形成と展開―

研究課題名（英文）Empirical study of university sports in postwar Japan - the emergence and development of dual system of university sports -

研究代表者
中村　哲也（NAKAMURA, Tetsuya）

高知大学・教育研究部総合科学系地域協働教育学部門・准教授

研究者番号：１０７１２２８４

交付決定額（研究期間全体）：（直接経費）　　2,200,000円

研究成果の概要（和文）：本研究課題では、高度成長期を中心とした大学運動部の組織および活動の実態、大学スポーツサークルの組織・活動の実態を解明することを目的として、文献調査とインタビュー調査を行った。その結果、戦前期から高度成長期にかけて運動部が実力主義に基づく優勝劣敗の競争の世界へと変化していくとともに、そうした運動部とは異なるスポーツのあり方を求めてスポーツサークルが設立され、1960年から70年代にかけて団体数や会員数が増加していったことを明らかにした。

研究成果の概要（英文）：In this research project, literature survey and interview survey were conducted with the aim of clarifying the actual conditions of the organization and activities of sports clubs and sports circles organized by university students in the highly economic growth period in Japan. As a result of the research, we got the conclusion that from the prewar period to the highly economic growth period, sports clubs changed to the world of competition based on the skills and physical performance of the sports, at the same time sports circles were established for the purpose of enjoying sports different from sports clubs, and the number of the circles and circle members increased in the 1960-70s.

研究分野：スポーツ史

キーワード：運動部　体罰　競争　スポーツサークル　多様性

１．研究開始当初の背景

本来、同好の士が集まってスポーツを行う集団という意味では、部活とサークルは同じものである。にもかかわらず、日本の大学スポーツでは、部活とサークルは明確に区別され、二重構造を形成している。大学スポーツにおける二重構造は、いつ、どのように、なぜ形成されたのか。大学スポーツに参加する学生の視点からこれらの問いに答えていくことで、部活・サークルそれぞれのスポーツ活動の特徴や独自性、そして日本の大学スポーツを総体的・構造的に解明することとなるのである。

２．研究の目的

本研究の目的は、1950 年代から 1990 年までの時期における、日本の大学スポーツの活動の実態や参加者の意識、それらを取り巻く社会経済的な環境についての調査を通じて、大学スポーツの二重構造が成立した要因を解明することである。

上記の目的を達成するために、1950 年代から 1990 年までの①大学運動部、②大学スポーツサークル、③大学スポーツに影響を与えた要因と考えられる 1964 年の東京五輪や高度経済成長、大学を取り巻く社会環境の変化等、以上 3 点について歴史学的手法を用いた実証的研究を行った。

３．研究の方法

研究課題を達成するため、1950 年代から 90 年までの時期を対象とした、下記の調査を行った。

①大学運動部・サークルの活動実態や構成員の意識を明らかにするため、大学スポーツが盛んな東京近郊の大規模私立大学を中心にして、大学史・運動部史・サークル関係資料を網羅的に収集した。運動部に関しては、これらの大学出身の有名選手の自伝・回想録等も収集した。

②サークルの活動実態や構成員の意識を明らかにするために、早稲田大学のスポーツサークル関係者 11 名にインタビュー調査を実施した。

③東京五輪や高度成長期に関する歴史学・スポーツ史関連の研究を収集・読解し、分析した。

４．研究成果

①明治中・高期に成立した日本の大学運動部は、1920 年代以降にリーグ戦や大会が組織化され、大規模に行われるようになっていった。戦後はさらに競技数や大会規模・参加校数が拡大し、それに伴い競技レベルも上昇していった。そうしたなかでも試合に勝利するために運動部は、厳しい練習の日常化、実力にもとづいた厳しい選手間の競争、監督・上級生を中心とした上意下達の組織編制、体罰を用いた指導等の特徴を備えるようになっていった。

②戦後のベビーブームや経済成長に伴う進学率の上昇を背景として、高度成長期に日本の大学は私立大学を中心にして学生数を大幅に増加させていった。1960 年代までは、スポーツをしたい多くの学生は運動部に入部していたが、そこは実力に優れたごくわずかの部員だけが練習・試合に参加できる実力主義の世界で、部員の大半は試合はおろか、まともに練習もできず、指導者や先輩からの体罰が日常的に行使される世界でもあった。

そうしたなかで、勝利を活動の主目的とせず、一般学生が気軽にスポーツに取り組むことを目的として組織化されたのがスポーツサークルであった。スポーツサークルの誕生は 1920 年代であったが、高度成長期にその種目数や団体数・会員数を増加させていき、1960 年代には団体数や会員数で運動部をしのぐようになっていった。

③スポーツサークルの団体数・会員数が増加したことにより、1970 年代には運動部員数ピーク時の約 40%にまで部員が減少したり、競技力を大きく落とした大学・運動部もあった。部員数の減少への対策として、体罰・しごきのない指導、上意下達の緩和、部長・上級生による新入生のサポートなど自主的な運動部改革を行う部もあった。
④1960 年代のスポーツサークルは数が少なかったために数百人もの会員を抱えるなど、大規模であった。しかし、次第に同じ種目の別の団体が数多く創設されていくなかで、1 段体当たりの会員数は少なくなっていった。団体数の増加に伴って、競技レベル、活動日数、単一種目／複数種目、単一大学／インカレなどの様々な特徴によって、同一種目でも多様な会員構成・活動方針をもった多くのスポーツサークルが組織化されていった。

５．主な発表論文等
（研究代表者、研究分担者及び連携研究者には下線）

〔雑誌論文〕（計　4 件）
1.中村哲也「運動部の歴史から自治と体罰を考える」、『コーチングクリニック』341 号、ベースボールマガジン社、査読無、pp.54-57、2017 年。
2.中村哲也「日本版 NCAA 構想の問題点と課題」、『現代スポーツ評論』36 号、創文企画、査読無、pp.53-65、2017 年。
3.中村哲也「運動部における体罰の構造と対応策」、『教育』856 号、かもがわ出版、査読無、pp.43-50、2017 年。
4.中村哲也「運動部活動と地域スポーツクラブとの協働は可能か？—部活改革と総合型の 20 年をふりかえる—」、高知大学地域協働学部編『地域協働論』、高知大学地域協働学部、査読無、pp.77-80、2016 年。

〔学会発表〕（計　2 件）
1.中村哲也「日本における高校野球試合の歴史的変遷－夏の甲子園大会を中心にして－」スポーツ史学会、2017 年、於日本女子大学。
2.中村哲也「1920-30 年代の大学運動部における競技技水準の上昇と体罰の発生—東京六大学野球を中心にして—」、スポーツ史学会、2015 年、於群馬大学。

〔図書〕（計　1 件）
1.中村哲也・佐藤信樹（他著者 31 名、22 番目）「多様なスポーツ要求の実現とスポーツ権を国民のものに－2004 年 4 月～2015 年 9 月」、新日本スポーツ連盟編『スポーツは万人の権利　新日本スポーツ連盟 50 年のあゆみ』、新日本スポーツ連盟、pp.320-386、2015 年。

〔産業財産権〕

○出願状況（計　　件）

名称：
発明者：
権利者：
種類：
番号：
出願年月日：
国内外の別：

○取得状況（計　　件）

名称：
発明者：
権利者：
種類：
番号：

取得年月日：
国内外の別：

〔その他〕
ホームページ等

６．研究組織
(1)研究代表者
　中村　哲也（NAKAMURA, Tetsuya）
高知大学・地域協働学部・准教授
　研究者番号：10712284

(2)研究分担者
（　　）

　研究者番号：

(3)連携研究者
（　　）

　研究者番号：

(4)研究協力者
1.星野　映（HOSHINO, Utsuru）
　早稲田大学・大学院スポーツ科学研究科・博士後期課程
2.松下　大樹（MATSUSHITA, Daiki）
　早稲田大学・大学院スポーツ科学研究科・修士課程
3.冨田　幸祐（TOMITA, Kousuke）
　一橋大学・大学院社会学研究科・博士後期課程